



岩井俊二さん
1963年仙台市生まれ。映画監督、小説家、映像作家など活動は多岐にわたる。新作「Last Letter」では、監督・原作・脚本・編集を務めた

新春市長対談

原風景・仙台を道しるべに未来へ

仙台市出身の映画監督・岩井俊二さんをゲストにお迎えし、2020年公開予定の映画「Last Letter」の仙台での撮影や故郷仙台への思いなど、都市長と語り合っていました。



会場：ウェスティンホテル仙台

初めての仙台での撮影

市長 あけましておめでとうございます。岩井監督は、素晴らしい作品を次々と世に送り出されてきました。初めに、昨年7月下旬から8月中旬にかけて、仙台市や宮城県内で撮影された映画「Last Letter」について教えてくださいませんか。

岩井 主人公が、亡くなった姉の同窓会に参加して偶然初恋の人に再会するところから始まる、ある夏休みの間に起きた、世代を超えた手紙を巡る物語です。今回、松たか子さんや福山雅治さん、広瀬すずさん、神木隆之介さんなど、理想的な方々に出ていただいて、思う存分仙台で撮影ができました。

市長 実は、偶然、私の自宅のすぐ近くでも撮影があったんです。ちょうど、お盆休みで自宅におりましたら、近所の方から「映画の撮影をしている」との知らせをいただきまして、邪魔にならないよう、拝見させていただきます。

岩井 えっ！お声掛けいただければ（笑）。

市長 いえいえ、ご迷惑になってはいけないと思ひまして。今回は、仙台市からも消防局と交通局が撮影に参加させていただきました。救

国して、石巻など被災地の友人、知人のところを訪ねて歩いたのですが、街の傷痕たるや言葉がありませんでした。

市長 監督は、復興支援ソング「花は咲く」の作詞もされていますね。昨年の3月11日に開催した仙台市の追悼式でも「みやぎの花は咲く」合唱団の皆さんがこの歌を歌ってくださいました。静か

岩井 詞と映像と一緒に依頼されたのですが、書けるだろうかという思いと、自分が書くべきなんだろうかという気持ちで先に立ちました。

震災の時に、石巻でいろいろな方とお話ししたんですね。亡くなられた方の人数が並大抵ではなくて、一人の方の周りに亡くなられた方が何人もいらっしやる。今は

いない人たちの話題が次々に出てきて、それでも皆さん笑顔で気丈に話しておられる。このような状況を初めて経験しました。そういう中で、亡くなられた方も一緒にいると思ったほうが自分の

急隊員の方はフル装備で、真夏の撮影は大変だったと思います。終了後に握手をしようとしたら、外した手袋から汗がバシャーッと（笑）。過酷なお仕事だと思いました。その方は、たまたま僕の高校の後輩の方だったそうですね。

市長 そう聞いています。その職員が高校生の時に、活躍している先輩として監督が母校に講演にいらしたとのことで、自分がこの撮影に参加できた巡り合わせに感動したそうです。監督ご自身は、高校まで仙台で過ごされたということですが、仙台での映画の撮影は

初めて撮ったのか、距離感が微妙なところがありました。ですから、今までは自分の知らない場所を旅して、そこで新しい景色を切り取るというスタイルでした。でも、18歳で仙台を離れてから、だいぶ時間がたって、自分の中で仙台が別な味わいの街に変わってきた。次第に、被写体として自分

市長 震災の時はどのような状況でしたか。

岩井 ロサンゼルスにいて、地震のニュースをテレビで見えています。中継で津波の映像が流れて、テロップには若林区と出ている。若林区は僕が幼稚園に入る前に遊び回っていた場所、まさに自分の記憶の中に残っている場所そのものでしたから、衝撃というか、我が身を削られる思いで、直接的な痛みを実感しました。5月頃に帰

中でバランスが取れたんです。考えてみれば、日頃、お互いに記憶にとどめていることでその人の存在を意識しているわけだから、亡くなられた方たちも一緒にいるのではないだろうか。復興もその方たちと一緒に進めなければつじつまが合わなくなる、そんな思いを持ちました。

「花は咲く」は、亡くなられた方も含めて詞を書かなければ自分



市長 そのような思いから作られたのですね。

岩井 ただ、それをどう言い表すのかというところは苦心しまして、あまり無理せずに、今書けることを書こうと思いました。ここまで広く皆さんに歌われるようになるとは思っていませんでしたが、それでも重圧は大きかったです。個人の創作とは違って、これを出していいのだろうかという迷いもありました。でも、自分にも東北の血が流れているので、明るく元気に「頑張ろう！」というよりは、しみみりと「そうだべ」「んだ」という波長で通じるトーンがいいかなと思って作りました。

創作の原点にするもの

市長 震災を経て、ご自身の中でいろいろな変化というのがありました。私たちが大きな変化を自分の中に感じつつ、今につながっていると思います。改めて、映像を通して仙台をご覧になられて、どんな風に感じられたでしょうか。

岩井 今までいろいろな街の風景を切り取ってきたのですが、その原風景が仙台だったんだなと感じました。昔、住んでいた西多賀や八木山のあたりは坂が多くて、久しぶりにそこを巡って見たら、自



分が執着していることを不思議に思っていた景色が、まさにそこにありました。毎日、学校に通いながら好きだったんだと。あまり自覚していなかったのですが、今回改めてここに原型があったんだなと思えました。

市長 例えば、仙台のどんな景色ですか。

岩井 本当にふとした景色なんです。仙台で過ごした高校生までは感受性が豊かで、日々景色を見ては「じーん」としていました。雨が降ればその光景に、夕方になればその景色にと、取り立てて何ということもない景色に胸打たれて。高校では美術部に入り、風景



市内での撮影の様子

ばかり描いていました。

大学に入っても風景を描いていたのですが、そのうち自分が描きたいものは違うのではないかと感じ始めました。自分が「じーん」としていたのは風景だけではなくて、そこに人間関係がまずあって、それを囲んでいる景色、それ全体で「じーん」としていたのではないかと。映画は、まさに人がいて景色がありますから、自分にとって原体験を復刻できる一番のものですね。

気持ちで通じ合う仙台人

市長 仙台市は今年、政令指定都市になってちょうど30周年という節目の年を迎え、人口は108万人を超えています。今回、市内各所で撮影されましたが、街の変化は感じましたか。

岩井 田んぼが住宅地になるなど、住んでいた当時とは変わったところもありましたね。一方で、一番町に古い街並みがまだ残っていました。僕自身、北一番丁付近で生まれたので、子どもの頃に見ていた景色が残っていたことがすごくうれしくて、こんな景色で育ったなと思いつながら歩きました。

市長 仙台の街は、自然もあり、監督のおっしゃったように懐かしさも楽しめる。そんなところが特



岩井 今でも中学校、高校の同窓会や東京組の飲み会みたいなものが出て、時間があるときに顔を合わせています。昔話や何気ない話をしているのですが、お互いに緩く、のびやかに連帯している感じがあります。本当にソフトな人柄の人が多くて、そこは仙台人の良さですよ。たまに、初めて会った人と話をしていると、仙台人だと分かる時があります。ひよっとして思ってしまう「仙台出身じゃないですか」って聞くとやっぱりそうだった（笑）。

市長 例えばどんな感じでしょう。

岩井 よそよそしくもないし、はっきり物を言いつぎる感じもない、ソフトで何かこう、ちょうどいい塩梅なんですよ。

あらゆる人に優しい街に

市長 今回、撮影には仙台のエキストラの方も大勢参加され、監督の作品に関わることができて、感動したようです。撮影のお手伝いをした「せんだい・宮城フィルムコミッション」でもエキストラに登録される方が増えていて、映像文化への関心が高まっているのを感じます。これからも、撮影にふさわしいような、またロケ地を選んでいただけるような街にするというのも私たちの目標です。

岩井 今回は、すごく緑の美しい映画になりました。本当にそんな映像ばかりでした。きっと映画を観た全国のお客さんが仙台って緑の街だなと思うような、杜の都にふさわしい映像が撮れたんじゃないかと思っています。映画ってそういう魔力というか、ただ街をきれいに撮るだけじゃなく、何か魂に通じるところがあると思います。新たに仙台を好きになってくれる人や仙台に住みたいという人が増えたり、あるいは仙台に帰りたいという人が増えたりすると、僕もうれしいです。

市長 首長としても、全国の皆さんが監督の映画を通して、仙台に心を寄せてくださるのはとてもうれしいことです。今から映画の公開が非常に待ち遠しいですね。

岩井 このタイミングで一作品できたのは、自分の人生においても貴重なポイントになったと、後々感じると思います。また、仙台で繰り返し撮りたいですね。

市長 それはとてもうれしいです！

最後に、これからの仙台の街が、こういう街であるといい



な、こういう街であり続けてほしいということがありましたら、聞かせていただけますか。

岩井 そうですね。自分のふるさととして、あらゆる人にとって、懐の広い、優しい街であってほしいと思います。福祉の面とか、いろいろな面で優しい街、それはすごく仙台の人たちの気持ちにも合っている気がします。人の心に寄り添えるような、そういう街として全国の人に知ってもらえるようになれば誇らしいと思います。

市長 私も、人々の気持ちに寄り添える優しい街として、仙台の魅力がさらに輝くよう、市民の皆さんとともに取り組んでまいります。今後とも私たちの心に残る、素敵な作品を届けてくださることを楽しみにしています。本日はありがとうございました。